



平山李重（ひらやま すえしげ）木造坐像

平山季重

平安末から鎌倉初期にかけて活躍した東国武士源頼朝の挙兵に参加した平山季重は、平家討伐などで軍功を挙げる。宇治川の戦いの先陣争いなどで活躍し、「平家物語」などに描かれている。

平山氏は、武藏七党の西党（日奉氏）に属し、船木田荘平山郷を本領とした一族で、季重の館は平山城址公園駅南東にあったとされている。また、軍功により筑前国（福岡県）原田荘の地頭に、季重の子供たちは筑前国や伊賀国の地頭職を受領していたが、その後滅亡している。

◇散歩のみどころ

京王線平山城址公園駅から戦国武将の痕跡を訪ねながら、多摩の横山と呼ばれる尾根を歩き、都道百六十号線野猿峠までの凡そ5kmの行程。駅を出るとロータリーの前に平山氏の先祖を供養する石碑が建っている。そこから南へと旧道を登っていくと宗印寺に至る。ここには、平山氏に関する石碑や仏像が多く安置されている。宗印寺から更に山道を登って行くと、頂き付近に平山季重神社がある。見晴らしが良く、日野、豊田方面が一望できる。神社を含む広大な公園が、平山城址公園として整備されている。公園内を散策しながら堀之内方面へと下ると、東京薬科大学に着く。薬用園の自然観察路、見本園、展示温室なども見学できる。大学から緑地や南陽台団地を暫く歩き、長沼公園へ。公園内の多摩の横山道といわれる尾根を歩いて、野猿峠バス停で解散。

●平山地名考

平山は、日野市を流れる浅川が、さらに北東へ湾曲する南岸段上に展開する集落である。

新編武蔵風土記稿に、「村名の起りは昔平山武者所季重が住せし地なるより平山村とは名付しならんいへり」とあるが、季重（すえしげ）が平山に住んだので平山を姓としたものとも考えられる。

平山のヒラは、タヒラ（タイラ）のヒラであって、ヒラヤマは丘のようない低い山、または平地のなかの低い陸などを指す言葉である。多摩丘陵は山というより丘、ヒラヤマであり、多摩の横山といわれるゆえんである。

「多摩の横山」と万葉集にも詠まれた多摩丘陵、平山はその下を流れる浅川に沿った地。山の丘陵の尾根に上がり、一望すると西に丹沢、その奥に富士の嶺、平野を巻き込むように甲州から多摩川の源である山々、

秩父とも連なり、はるか野の彼方には上州赤城、日光男体山から那須の峰、そして筑波の山々が見て取れる。眼下には浅川があり、その上流へとたどれば山裾に広がる八王子の街、正面には多摩川と浅川にはさまれた日野の地が望め、さらに見れば武蔵野台地が関東平野と名をかえるあたり、その昔の「武蔵野」が目の前に広がる。

●平山季重の頃

今を去ること約九百年前、当時の武蔵国には武蔵七党と称される武士集団があり、彼らは源氏に属して勢力を張っていた。横山、西、村山、児玉、丹、猪俣、与野らの各党で、他に畠山重忠、熊谷直実の党などがあつた。

平山の尾根から見渡せる地は、当時は武蔵七党の支配地だった。そし

てこの平山の地を領していたのが、平山季重率いる「平山氏」という武士一族であり、西党に属していた。

西党は現在の日野市、立川市、狛江市、そしてあきる野市あたりに勢力を張り、現在の八王子を拠点とした横山党と並んで多摩川と浅川の水をもつて村落を開拓し、農民とともに成長した裕福な地主階級であった。この時代の武士が盛んに用いた赤駒、黒駒を産する牧場を経営するなど、経営者でもあった。

平山氏の祖先は、日奉宗頼（ひまつりむねより）で、京都から武蔵府中に国司として赴任し、任期後、帰国せずに土着した人である。その子孫たちは東光寺台地（日野市新町）に拠点を置き、西党の首領として一族を束ねていた。平安時代中期の頃といわれている。



平山城址公園から見た八王子方面と秩父連山

● 平山氏の生い立ち

平山城主平山氏の先祖は、日野市東光寺（現日野市新町五丁目）を本拠地として栄えた日奉（ひまつり）氏という豪族の出である。

日奉氏は日祀部（くさかべ）の末裔といわれ、日祀部は敏達（ひたち）天皇六年（五七七）二月に初めて置かれた部族の名で、日々御祀りをする部族であったという。日奉宗頼はのちに西宗頼と称した。

日奉氏の居館跡である日奉城址は、日野台の北縁で七ツ塚古墳付近ではないかといわれている。ここは北を多摩川に、西は谷地川によって区切られる舌状の台地で、南は高鞍野、すなわち日野台が広がり、眺望きわめてすぐれた地点である。その鬼門に当たる場所に、廃寺となっている東光寺を建立した。また、現存している東光寺薬師堂も関連あるものと思われる。薬師堂は成就院境内の現在地に移ったが、その薬師如来は安

産のご利益があり、安産薬師として知られている。

日奉宗頼は東光寺を根拠地として西党を組織し、武士団武蔵七党の一党となった。その勢力範囲は日野を中心として多摩川の中流および支流浅川沿いの肥沃な田野であった。東は関戸、稲毛あたりから、西は平山、長沼、川口あたり、北は西多摩の東秋留あたりに及んだといわれている。

●平山武者所季重

当時の武蔵を含め、東国の武士の多くは若年で京に上った。平山季重も同様で京で上皇を守る衛士（武者所）を務めていた。平山季重が平山武者所季重と呼ばれる由縁がここにある。

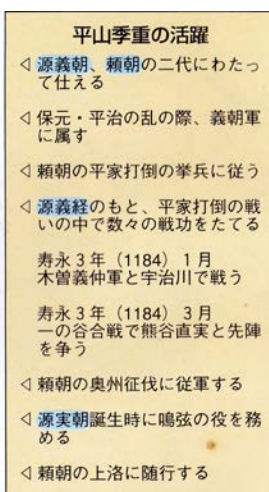
平治元年（一一五九）平治の乱が勃発すると季重は源義朝に従い戦う。平治物語によれば季重は奮戦し、特

に侍賢門での戦闘で平重盛の軍勢五百騎に源義平（悪源太）と共にわずか十七騎で戦いを仕掛け、これで猛者として大いに名を上げた。しかし、この戦いは敗戦となり、義朝とともに東国へ逃げる途中義朝は謀殺されてしまい、季重は東国武士たちとともに関東へ戻ることになる。これより三年前に起こった保元の乱でも武蔵武士の多くが源義朝と共に戦い、平山季重も活躍している。

平治の乱以後、武蔵は平氏の支配を受けることとなった。治承四年（一一八〇）、伊豆にいた源頼朝がついに平氏に対して旗揚げした。武蔵七党も源氏に加担することになり、平山季重は源義経の配下となって奮戦する。十月、富士川で戦勝し、続いて十一月常陸に転戦。佐竹氏の金砂城を攻め落とした時、季重は熊谷次郎直実とともに「身命を惜しまず先頭で殊勲をたてた」と頼朝から賞されたことが吾妻鏡に記されている。

寿永三年（一一八四）一月、木曾

義仲を撃つべくして遣わされた義経に従い、京へと向かった季重は宇治川の戦いでは敵陣に先頭を切って斬り込んだ。この時の活躍がライバル熊谷直実とともに平家物語にも描かれ、後世に伝えられているのである。翌文治元年（一一八五）、屋島・壇の浦の戦いでも勇名をはせる。文治五年（一一八九）奥州征伐の時には、かつて自分が従った義経を討つという皮肉な運命に出会うことになったが、その功績をもって「驍勇無双の勇士」と賞賛され、幕府の元老に取り上げられている。



源平合戦図（国芳筆）
で描かれた李重



①平山城址公園駅

駅前ロータリーがある場所は、昭和四十二年（一九六七）まで平山小学校があった。現在は平山地区センターや図書館になっている。明治十七年（一八八四）に小学校ができるまでは太平山大福寺という寺の敷地であった。この大福寺は天正年間（一五七三〜九二）西多摩の平山氏が先祖の季重を供養するために建てたものである。大福寺廃寺後は境内にあった墓碑など季重に関するものは宗印寺に移されている。



京王線平山城址公園駅
(平山季重居館跡)

●平山季重遺跡之碑

京王線平山城址公園駅前ロータリー南にあるこの石碑は、下総国香取郡鏑木村（現千葉県香取郡干潟町鏑木）の豪農平山正義が、幕末の嘉永年間（一八四八〜五四）に、先祖の平山季重の遺跡を後世に伝えようと大福寺に建立したものである。その左には、大正十四年（一九二五）、七生青年団平山支部が建てた「季重公霊地碑」がある。

大福寺跡地は平山季重の居館跡ともいわれている。ただ、居館跡は駅から西北、浅川を渡った大名淵と呼ばれている川に面した台地にあったという説もある。大名淵よりもさらに西より、季重が鎌倉八幡宮を勧請したと伝えられている氏神、八幡神社近くだったのでは、という説もあり、確かなことはわかっていない。

②大沢山宗印寺



平山季重遺跡之

日野市平山六一五一一

宗派 曹洞宗

八王子市由木金峰山永林寺末

本尊 聖観世音菩薩

寺宝 平山季重墓碑 匱

木造平山季重座像

木造地藏菩薩、千駄地藏

木造薬師如来坐像

開山 一東天樹大和尚

開基 中山助六郎照守

開創 寛文三年（一六六三）

縁記によれば、裏手に当たる地に一体の聖観世音菩薩が安置されていた。無量院の廃庵内ではなかったかといわれている。その菩薩は人々の求めには必ず応え、願いの叶えられぬことはなかったといわれている。そこで、当時平山の地頭だった中山照守は永林寺の傑秀禅師に頼んで一庵を建て、その像を安置したのが始まりといわれている。慶長四年（一五九九）のことである。この聖観世音菩薩は本堂内陣の中央に安置しており、武相観音霊場の第四十四番札所となっている。中山氏は武蔵国入間郡飯能中山村に起った鎌倉以来の名族であった。開基照守の父、中山勘解由家範は八王子城で侍大将として豊臣軍と奮戦し勇名を馳せた。照守は家康公に召し出され、大阪冬の陣や信州上田城攻めの際、奮戦して上田七本槍の名を残したり、荒馬を乗りこなすなど、父親譲りの武勇の人であったことが知られている。しかし、照守が一庵を結んだものの、

一寺を成すには至らなかった。

時を経て、寛文三年（一六六三）になり、一東天樹が檀徒を募り、新たに一寺を開いた。これをもつて一東天樹大和尚が開山と伝えられている。さらに四十二年後の宝永二年（一七〇五）、三世大本慧立大和尚が痛んだ堂宇を復興させた。この時から開基中山照守の戒名宗印居士をとつて、大沢山宗印寺と号することになった。明治になると、平山季重を供養するために建てられた太平山大福寺が、明治十七年（一八八四）廃寺となり、宗印寺に併合された。これによつて大福寺にあった平山季重の墓、日奉地藏堂、大福寺本尊の千手観世音菩薩立像も宗印寺に移された。



本尊聖観世音菩薩



宗印寺全景

● 平山季重の墓

元は大福寺にあったものが併合により、宗印寺に移された。高さ一・八mの五輪塔で、台石は季重二十五世の孫松本藩士平山季良が建てたとある。



平山李重の墓

● 平山薬師

木造薬師如来座像

薬師堂は昭和十八年（一九四三）平山地区に都道が開設された際、その道筋にあった薬師堂をこの地に移

したものの。古くから平山の寅薬師と呼ばれ、安産と眼病平癒を祈願としている。薬師如来座像三十三cm、寄せ木造りで、彩色がほどこされている。

● 日奉地藏菩薩坐像

千駄地藏

日奉地藏堂内に安置されている地藏菩薩坐像は高さ四十cm。言い伝えによれば季重が戦勝のお礼に安置したもといわれている。この像を中央にして左右それぞれ五百体、千駄の小地藏像が安置されている。補充したものもあるが千駄地藏としての形を伝えている。また中央には平山季重座像も安置されている。松材の寄木造で制作年代は江戸時代前半ごろと考えられている。現在の地藏堂は平成十一年（一九九九）、宗印寺の改修時に新築されたものである。



千駄地藏（日奉地藏）



平山李重坐像と千駄地藏



平山李重木造坐像

● 林丈太郎の墓碑

新品種、干ばつに強く、品質がよくその上収穫量の多い「平山陸稲」を発見した林丈太郎をたたえた墓碑がある。丈太郎は昭和二年（一九二七）五十二歳で他界した篤農家。墓は平山の宗印寺にある。墓碑には、「林丈太郎ここに眠る 品質改良を創む。また、平山の名を全国に広めたり墓石はいとも小なり されどその功績はいとも大なり」とある。

近年、その「平山陸稲」の種が保存されていたことが判り、地元の農家と平山小学校の児童で復活し、栽培に挑んでいる。市内の十八小学校に種子を配り、さらに栽培面積を増やす計画もあるという。



林丈太郎の墓碑
(平山陸稲発見者)

● 六面体地蔵と六地蔵

六体の地蔵菩薩は、六道において衆生の苦患を救うといわれている。六道とは、地獄道を教化する檀陀、餓鬼道を教化する宝珠、畜生道を教化する宝印、阿修羅道を教化する持地、人間道を教化する除蓋障、天道

を教化する日光のこと。六地蔵の中央に六面体地蔵が安置されるのは珍しい。八月二十四日は地蔵盆会の日。



六面体地蔵と六地蔵



六面体地蔵

●水子地藏菩薩

この世に日の目を見ずに消えた水子一切の精霊の頓生菩提を念じ、参拝者の香華の絶えることのない様にと建立されたもの。志しある人の供養、法要を祈念しているという。



水子地藏菩薩と水子地藏

●法源堂

昭和三十七年（一九六二）、先住正宗徹源大和尚の遺志により、檀信徒の協力を得て完成した。堂中に五重塔を収め、釈迦牟尼仏の尊像を奉祀してある。



法源堂中の五重塔

●その他の神仏

境内には、平山天神宮、愛染明王などの神仏が安置されている。



愛染明王



平山天神宮

③ 季重神社

都立平山城址公園入口の北側、丘陵が少し突き出ている所に平山季重神社が建っている。

古くは日奉明神社と呼ばれており、現在でも日奉神社とも呼ばれている。平山季重が祖先の日奉氏を祀ったものとも、季重を子孫が祀ったものともいわれている。

この場所は丸山と呼ばれ、かつては平山氏の見晴らし台があった場所との言い伝えもある。現在の祠は平成十七年（二〇〇五）四月三日に落成したもので、正面に「平山季重」と刻まれている。平山八幡神社の氏子や地域の人々の協力で約五十年ぶりに建て替えられたもの。

平山季重の居館があつたとの言い伝えもある平山橋北の大名淵には、大正末頃安田財閥の安田善兵衛氏の別荘があり、昭和三十年代それが取壊された時、敷地内にあつた稲荷を丸山に移して祀り、祠を建てたのが

先代のものである。もともとこの場所には古くから石の祠があり、それも礎石の中心に大切に祀られ、そこに合祀したものである。



李重神社（日奉神社）

④ 平山城址公園 都

八王子市堀之内

都立多摩丘陵自然公園として指定を受けたのは、昭和二十五年（一九五〇）十一月二十三日。都市公園として整備開園されたのは昭和五十五

年（一九八〇）六月一日。面積は、十二万十三・五八㎡。

昭和三十年（一九五五）、京王電鉄は「平山駅」を「平山城址公園駅」と改名。また京王電鉄は、沿線のレジャー施設として公園を開園した時に、ここに平山氏の物見台があつたとの言い伝えにちなんで「平山城址公園」と名付けたという。お城の遺構との説もある。また大正時代ゴルフ場が造られていたともいわれている。また公園からは、京王電鉄で使われていた往時の車両を研修所内に見ることができる。



公園内にある猿渡の池

●多摩の横野と横山の地名考

武蔵名所図会に「古詠ありて玉の横野とあれば当郡中のことにてあれども按ずるに横山というべきあたりの横野というにあらずや」とある。また、江戸名所図会には「小仏の嶺より小山田里までの多摩郡に属せり平山或は横山などといい既に古哥にも玉の横山と詠せり 皆この間にあり・・・南北に高低なく板東路凡そ百里あまりあり 続く故につづきの岳の名ありといへり」とある。

ちなみに「都筑の岳」は、今の横浜市西北部から町田市にかけての地域を指し、多摩丘陵の古称といわれている。

また、我が国最古の万葉歌集巻二十に載る「陰麻能余許夜麻」以来、多摩郡の丘陵地を指す呼称といわれ、今も多摩丘陵といっている。



平山城址公園から見た秩父連山

●多摩の横山道

多摩の横山道は、現在も部分的に現存している。基本的に古代人が旅をする場合、山の尾根を登り下りしながら歩いたのが通常であった。暑い季節には日陰道を、冬には陽のあたる日向道を歩くのが自然であった。今から約千三百年前の律令時代、武蔵国から九州沿岸警備に就いた防人は、どの道を辿ったのか興味深い。



多摩の横山道

豊島郡粗虫（あらむし）の妻が、別際に読んだ歌は有名である。

「赤駒を山野にはかし捕りかにて

多摩の横山徒歩ゆか遣らむ」

（巻二の四四一七）

この歌を刻した石碑が多く残っている。八王子市散田町の万葉公園、府中市南町の府中市郷土の森、そして多摩市の一本杉公園などである。尾根幹線道路に並行した多摩のよこやま道の国士舘大学の運動場あたりにも建っている。



府中市郷土の森



万葉公園

豊島郡粗虫（あらむし）の妻が、別れ際に読んだ歌碑

⑤東京薬科大学

創立は、明治十三年（一八八〇）十一月、藤田正方が東京本所に「東京薬舗学校」を設立したのが始まり。その後、昭和二十四年（一九四九）二月、「東京薬科大学」を設立。昭和五十一年三月八王子堀之内にキャンパスを移転した。そして、昭和五十五年（一九八〇）十一月創立百周年を迎え、現在、学部は、薬学部、生命科学部、大学院を有す。



一本杉公園

●薬用植物園

キャンパス内は自然が多く残された多摩丘陵にある。この丘陵地を利用して薬用植物園は作られている。都内で一番広い薬用植物園で、一般公開されている。また、年二回定期的に「薬用植物公開講座」「薬用植物園見学会」も開催されている。



東京薬科大学



園内の左：温室 右：池

⑥長沼公園 都

八王子市長沼町 他

都立多摩丘陵自然公園として指定を受けたのは、昭和二十五年（一九五〇）十一月二十三日。都市公園として整備開園されたのは昭和五十五年（一九八〇）六月一日。面積は、三十六万二千四百七十・三五²m。八王子市長沼町南部の丘陵地帯をしめる都営風致公園。多摩丘陵北部近郊緑地の一部で、園内を野猿峠へのハイキングコースが通っている。



見 本 園



多摩の横山全景

また、明治、大正期に最盛であった「長沼の磨き砂」と呼ばれた砂が、園内のあちこちに残っている。昭和十四年（一九三九）以降は、家庭用器具のミガキ粉として販売されていた。

この地は、中世の城館跡で、長沼氏に關係する館跡ではないかともいわれている。

◎主な参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・日野市観光協会資料
- ・宗印寺資料
- ・都立平山城址公園資料
- ・八王子事典
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・とんとんむかし 菊地正著
- ・公益財団法人東京都公園協会
- ・野市観光協会パンフレット
- ・インターネット各ページ

メモー